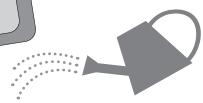


今月の ブックトーク



早いもので、今年も師走となりました。文字通りせわしくなる月ですね。クリスマスは、すっかり日本でも



チャールズ・ディケンズ・作
脇 明子・訳
岩波書店

親しまれていますが、日本で初めてクリスマスを詠んだ歌人は「正岡子規」だと言われています。「八人の子どももむつましクリスマス」(1896年)で冬の季語になりました。今回は、クリスマスの代表的な古典を紹介します。

最初は、英国の作家ディケンズの『クリスマス・キャロル』(1843年)です。守銭奴と蔑まれ孤独なスクルージの前に突然7年前に亡くなった相棒が現れこれから3人の幽霊が一人ずつ現れることを予告します。幽霊は、それぞれ過去、現実、未来の世界を見て悲惨な最後を提示し、彼を改心させます。言葉とか顔つきといったささいなことで与えられる幸せは、一財産を積んだって買えないくらい大きいとスクルージは言っています。

次は、『飛ぶ教室』(1933年)です。ドイツの中等学校ギムナジウムの寄宿生たちのお話。「飛ぶ教室」とは、学校のクリスマス祭に上演する5年生(中3程度)



ケストナー・著
丘沢静也・訳
光文社

の生徒自作自演のお芝居のこと。しかし、実業学校生との学校外でのいざこざもあってクリスマス前の寄宿舎は、実に慌ただしい。周りの大人たちは愉快でとても優しく見守ります。いじめには、「どんな迷惑行為も、それをやった者にだけ責任

があるのではなく、それを止めなかつた者にも責任がある」としてクラス全員に罰としてこの言葉を5回

12月(師走)「クリスマス」

前田 由紀

／渋谷教育学園渋谷中学高等学校司書教諭

書かせたりします。思いがけないクリスマスプレゼントも最後に出てくるので、お楽しみに。

今度は、8歳の女の子の質問に答えたアメリカの新聞ニューヨーク・サンの社説

『サンタクロースっているんでしょうか?』(1897年)です。アメリカのジャーナリズムにおいて、最も有名な社説と言われているそうです。目に見えるものしか信じないのは、心がせまいため。

サンタクロースがいなければ、「子どもじだいに世界にみちあふれている光も、きえてしまうでしょう。」どのように納得させたかは、全文を読んで味わってみてください。

最後は、チャイコフスキー作曲のバレエでも有名な『くるみ割り人形』。ドイツ作家ホフマンの『くるみ割り人形とねずみの王さま』が原作です(1816年)。ホフマンは、友人の病弱な幼い娘マリーのために作ったそうです。お話の主人公もマリー。クリスマスイブにクリスマスツリーの下にあったちょっとへんてこなく



E.T.A ホフマン・文
スザンネ・コッペ・絵
リスペート・ツヴェルガー、
池田香代子・訳
BL出版

るみ割り人形が気になります。夜も更けるとなんとくるみ割り人形の軍隊とねずみたちの戦いが始まっています。クリスマスの森が現れ、透き通るマジパン城、夢の世界と現実が重なる不思議な世界。今回は、オーストリア出身ツヴェルガーの挿絵が秀逸な絵本版を紹介します。抑えた色調に幻想的な世界が広がります。

どうぞ良いお年をお迎えください。



中村妙子・訳
東 逸子・画
偕成社

